



発達障害

発達障害は、脳機能の発達に関連する生まれつきの障害です。発達障害がある人は、コミュニケーションや対人関係をつくるのが苦手です。また、その行動や態度から「自分勝手」とか「変わった人」「困った人」と誤解され、敬遠されることも少なくありません。しかし、それが、親のしつけや教育の問題ではなく、脳機能の障害によるものだと理解すれば、周囲の人の接し方も変わってくるのではないのでしょうか。

なお、発達障害には3つのタイプがあります。複数の障害が重なって現われることもありますし、障害の程度や年齢(発達段階)、生活環境などによっても症状は違ってきます。発達障害は多様であることを理解することが大切です。できないことや苦手なことがある一方、分野によれば高い能力を発揮する人もいます。

自閉スペクトラム症／自閉症スペクトラム障害(ASD)

自閉症を中心とする障害グループの総称で、従来は広汎性発達障害(PDD)と呼ばれてきたものです。ASDと名称変更されるに伴い、心理的発達の障害ではなく、生まれつきの「神経発達障害」に位置づけられました。

多くの研究結果から、自閉症、アスペルガー障害、特定不能型とタイプ分類をする根拠がないことがわかり、連続体(スペクトラム)と考えられるようになりました。

普通に生活している人の中にも軽度の自閉スペクトラムが認められることがありますが、そのことで適応上の障害がある場合にのみ自閉スペクトラム症と診断されます。

通常は発達早期に症状が認められますが、保護的な環境では症状が見られず、後になり社会的な行動を求められる年齢になって初めて症状が明らかになり、診断されることもあります。

●ASDの症状

・対人関係・社会性の障害

他者との情緒的交流や同年児との仲間づくりができてにくい。

・コミュニケーションの障害

視線、表情、身振りなどの非言語的コミュニケーションの使用に制限があります。

・パターン化した行動、興味関心の限局、感覚の障害(過敏、鈍麻)

動作やフレーズの反復、同一性の保持、興味関心の限局や、聴覚、触覚をはじめとする感覚領域の過敏さや鈍感さがあります。

●ASDには注意欠如・多動症/注意欠如・多動性障害(ADHD)や精神疾患の併存が多いことが指摘されています。

●ASDの重症度は、社会コミュニケーションとこだわりの2領域について、それぞれ別に評価します。

●ASDと診断するだけでなく、個人の状態をより詳細に評価することが、早期から見通しを持った支援を継続するために大切です。

●なお、従来のアスペルガー障害という用語は、正式な診断名ではなくなりましたが、便宜上使用しても構わないとされています。

注意欠如・多動症 / 注意欠如・多動性障害(ADHD)

- 「不注意:集中できない、忘れやすい、うっかりミス」、「多動性:じっとできない、活動性過多、多弁」、「衝動性:抑制が効かず考えるよりも先に行動する、待てない、我慢できない」の3症状を特徴とします。3つの症状が揃っているタイプを「混合型」、多動性と衝動性が顕著なタイプを「多動・衝動優勢型」、また多動症状がない場合を「不注意優勢型」と分類します。12歳までに複数の場面で、6ヶ月以上にわたり症状が見られるときに診断されます。
- 多動症状は幼児期に最も目立ち加齢とともに軽減しますが、不注意症状は青年期以降も持続することが知られています。衝動性症状は支援の適切さや本人の自己肯定感のあり方により、良くも悪くも変化します。
- ADHDの支援には、心理教育的支援とADHDに特化した薬物療法の2つのアプローチが有効です。
- ADHDは子どもの時期だけの障害ではなく、ASDと同様に慢性経過をとる神経発達障害です。発達期の治療教育だけでは症状をコントロールできず、成人期以降も支援や治療を必要とするAdult ADHDが近年注目されています。

限局性学習症 / 限局性学習障害(LD)

- 全般的な知的発達に遅れはないのに、読む、書く、計算するなどの特定の能力を学んだり、行ったりすることに著しい困難を示します。



それぞれの障害の特性

- 対人関係・社会性の障害
- コミュニケーションの障害
- パターン化した行動、興味関心の限局
- 感覚の障害(過敏、鈍麻)
- 知的発達は、遅れのある人から高学歴な人まで、幅広く多様
- ADHD、学習障害、チックや不器用さなど、他の神経発達障害を併存することが多い
- ASDは医学的な基礎疾患に伴って出現することもある

- 不注意(集中出来ない)
- 多動・多弁(じっとしてられない)
- 衝動的に行動する(考えるよりも先に動く)

知的障害
(ID)

注意欠如・多動症/
注意欠如・多動性障害
(ADHD)

自閉スペクトラム症/
自閉症スペクトラム障害
(ASD)

限局性学習症/限局性学習障害
(LD)

- 「読む」・「書く」・「計算する」等の能力が、全体的な知的発達に比べて極端に苦手

発達障害のある人と接する時は

発達障害は、障害の種類や程度、知的水準によって症状は違い、年齢や性格などによっても、一人ひとり、症状の現れ方は違います。また、同じ人でも、環境によっては症状が目立たなくなることもあります。

発達障害のうち、ASDは脳の情報処理システムに複数の機能障害があるといわれており、ライフステージを通して、社会的状況や集団生活上で多くの支援を必要とします。一般的に、視覚情報を把握することは得意ですが、聴覚情報(複雑な話しことばなど)を意味づけて理解することや目に見えない相手の気持ち、暗黙の了解や約束事、未経験のことなどを、想像力を駆使して想定し、対処することが苦手です。また、ものごとの細部に注意が向きやすく、全体像を把握することが苦手です。

発達障害のある人は、生活の中で困難なこと、苦手なことが一人ひとり違うため、どのような支援があると安心してすごせるのか、活動できるのかをご本人からよく聞きとって、それぞれの特性に応じて配慮し、支援することが重要です。

- コミュニケーションをとる際には、「ゆっくり」「短く」「具体的に」。
- 優先順位を明確に具体的に伝え、一度に二つの指示は出さない。
- 視覚的な情報を提示して説明する。
- 自分の気持ちや考えを表現することや相手にうまく伝えることが苦手なので、「早く」、「まだ?」など急かさず、じっくりと話を聞くことが大切。
- 行動の修正が必要なときには、否定的な表現(～してはいけません)よりも肯定的な表現(～をしましょう)で伝えるよう努める。
- 枠組みを明確にし、その場の約束事は初めにはっきりと伝える。
- 発達障害のある人は、急な変化に対応することが難しいので、前もってスケジュールや計画などを伝えておく。
- 発達障害のある人には、適度な距離を保って、穏やかな態度で接する。結果を急がず、長い目で支援する。
- 安心できる環境を整える。共感性をもって暖かく見守る。
- 対応が難しい時には、専門家に相談する。

自閉スペクトラム症／

自閉症スペクトラム障害(ASD)のある人への配慮

- 肯定的、具体的、視覚的な伝え方の工夫
 - ・何かを行うときには、必ずその意図や目的を伝える。
 - ・手順や方法を図や写真などを使って説明する。
- スモールステップによる支援
 - ・新しく挑戦する部分は少しずつにして、目標を達成できるようにする。

注意欠如・多動症／注意欠如・多動性障害(ADHD)のある人への配慮

- 気の散りにくい座席の位置の工夫、分かりやすいルール提示などの配慮
- ストレスケア(傷つき体験への寄り添い、適応行動が出来たことへのこまめな評価)
- 集中力の欠如や衝動性には、専門医療機関での治療が有効

限局性学習症／限局性学習障害(LD)のある人への配慮

- 得意な部分を使って情報アクセスし、表現できるようにする(ICTの活用など)
- 苦手な部分について、課題の量・質を適切に加減し、柔軟な評価をする

その他の発達障害のある人への配慮

- 叱ったり拒否的な態度を取ったりするのではなく、日常的な行動の一つとして受け止めるなど、楽に過ごせる方法を一緒に考える



気になることがありましたら、お住まいの市町村の窓口や「発達障害者支援センター」にご相談ください。

発達障害がある場合、早めに障害に気づき、特性に合った対応をすることにより、さまざまな能力を伸ばし、安定して生活していくことができます。もし、「うちの子は発達障害なのだろうか」など、気になることがあるときは、お住まいの市町村の窓口や「発達障害者支援センター」にご相談ください。

発達障害者支援センターでは、発達障害のある人の日常生活についての相談支援などを行っているほか、医療、保健、福祉、教育、労働等の各関係機関と連携を図りながら、障害の特性とライフステージに合わせた支援を提供しています。

